

# 美味しい

## 1. メジロ

倉吉市の鳥でもあり、よく知られている鳥です。人をあまり恐れないので行動の観察には適当で、「チーチー」という鳴き声を目印に居場所を探します。そこでは餌を探しているはずですが。一般に鳥類は体を重くしてはいけないため、食物の腸内の滞留時間は短く、一日の大部分は食べ物探しに費やされます。メジロは1月頃にはサザンカ、2・3月はツバキというように蜜のある花に集まります。鳥の嘴(くちばし)の形態は食性を示しています。メジロの細長い嘴は花の中に突っ込んで蜜を吸うのに適していて、甘いものが好きなメジロは、年中果物が実る熱帯地方に生まれた種と考えられます。



初夏の繁殖期、ヒナの成長にはタンパク質が大量に必要であるため、若葉を餌とする昆虫類を与えますが、そのヒナたちも8月末には甘い果実に集まるようになります。イヌビワは熱帯地方が中心の植物で、イチジクの仲間です。打吹山ではイヌビワが黒く熟して甘くなるとメジロなどが早速やってきてあっという間に食べてしまい、なかなか人の口には入りません。

11月には黒く乾いたカラスザンショウの実に集まっています。この実の皮が脂質を含むため、多くの鳥に好まれます。冬を前に脂肪が必要なのでしょう。行動を追跡することでいろいろなことが分かります。

## 2. イヌビワの雌株の果実

イヌビワはイチジクの仲間であり、イチジクと同じ形状の小型の果実を葉腋につけます。イチジクは「無花果」と書きますが、個々の花は内部に多数あり、受粉によって種子もできます。



実と思っている若いイチジクは「花囊」といい、熟したものを「果囊」といいます。囊はふくろの意味です。イヌビワの雄株には5月に多数の花囊が付き、6月には次々赤熟していきませんが、堅いうえにスカスカしていて食べられません。雌株は遅れて6月から花囊が付き始めます。イヌビワコバチによって雄株の花囊から花粉が運ばれ受精し、種子ができた雌株の花囊は、8月下旬に黒熟して果囊となります。



この雌株にできた果囊は非常に甘く、果皮を傷つけると蜜状の糖液が流れてきます。果皮が丈夫であれば市場への出荷もできそうな果物です。この甘さが動物を引きつけ、メジロやヒヨドリといった鳥やテンなどが食べることで、糞とともに種子を散布します。動物の腸内を通過しないと発芽が促進されないという研究報告もあります。

冬、落葉したイヌビワにイチジクが残っているのは雄株で、イヌビワコバチの越冬用に準備したものです。